

MMO TIMES

エムエムオータイムズ

Traffic Safety 

2016年(平成28年)春・夏号 [交通大学編] 目次

○第20回記念大会 交通大学を開催・・・・・・・・・・・・・・・・(1)

MMO新聞 [MMO TIMES]

マイクロメイト岡山株式会社 発行
営業本部 岡山市北区奥田本町 22-4 〒700-0932
TEL 086-231-0900 FAX 086-226-4084

http://www.mmo-co.com/

事故ゼロ 安全な交通社会へ向けて 第20回記念大会 交通大学を開催

平成28年6月27日(月)、アークホテル岡山にて「第20回記念大会 交通大学」が開催され、各地から集まった約150人の受講者が講義に真剣に耳を傾けた。



今回の交通大学は、「これからの安全な交通社会を目指して—交通事故の悲劇をなくし快適な交通環境を構築するために—」をテーマとし、昨年もご登壇いただいた鈴木春男先生をはじめ様々な分野でご活躍中の講師の方々による講義が行われた。

次項からは、各講座の内容の抜粋と、アンケートに寄せられた受講者の意見を一部紹介する。

交通大学20年のあゆみ

コーディネーター 金光 義弘

(川崎医療福祉大学 名誉教授)

講義の前に、開講の挨拶として、コーディネーターの金光

先生より、今回で20回目を迎える交通大学のあゆみについてお話をいただいた。



交通大学は平成7年に、「誰もが安心して暮らせる快適な交通社会を構築する」ための多面的な情報を発信することを目的としてスタートし、その後、21年間にわたり、世相や交通社会の状況に応じて多様なテーマを取り上げ、学術的知見に裏付けられた情報を発信してきた。

一方で、交通問題を第三者的な視点で捉えることなく、自らの課題として受け止めるため、交通死亡事故の遺族の方や視覚機能・運動機能を失われた方、高次脳機能障害者とその家族の方など、当事者のお話を聞く機会も設けてきた。

交通大学の歩んだ20年は決して目覚ましいものとはいえないが、岡山の地で蒔いた安全で

安心できる交通社会実現の種は、いずれ全国各地で実となり花を咲かせるものと期待している。

受講者の方から頂いたご意見

□今回、初めて参加させて頂き、大変勉強になりました。色々な業種の方からお話しを頂けたのは、とても貴重に感じました。これからも続けて頂きたいです。

安全な交通社会を築くために

—ヒトを動機づけるための処方箋—
10年後を見据えて 安全に向けてヒトがモノにどう働きかけるかを考える

講師 鈴木 春男
(千葉大学 名誉教授)

基調講演では、従来の交通事故への対策に加えた今後の安全対策を「第3の処方箋」として、どのような取り組みが必要とされているのか、講義が行われた。



交通事故死者数下げ止まりの今、第3の処方箋の必要性

交通事故の死者数を見ると、昭和45年をピークに昭和54年まで減少し、その後増加に転じ

ている。それも平成4年をピークに減少し始め、ここ数年は下げ止まりの傾向が見られる。

従来の対策としては、第1の処方箋(S45年→S54年)として、歩車道の整備や立体横断歩道・カーブミラー設置など「モノ」への対策と、第2の処方箋(H4年→H27年)として、参加・体験・実践型交通安全教育という「ヒト」への対策がある。

この2つの処方箋の併用により大きな成果が得られたが、これだけでは対応できない「限界」が出てきている。今、第3の処方箋が必要なのではないか?

最大の課題は高齢者対策

わが国では、交通事故死者数のうち高齢者が半数を超える(H26年52.5%)。これは、他の年齢層に比べ高齢者は約2倍危険性が高いことになる。従って高齢者への対策は交通事故死者数の削減に向け、重要な課題となる。

しかし、対策をする上で重要なのは、高齢者といってもそれぞれ置かれている交通環境は異なり、抱える問題も異なっている。生活実態に応じた指導が必要である、ということである。(例：都市部では公共交通機関での移動が中心・地方では車やバイクが欠かせない 等)

高齢者への動機づけ

日本の高齢者は比較的、経済・生活的に自立しているにも関わらず、交通分野においては弱者としての扱われることが多い。しかし、高齢者の生活は比較的安定しており、時間的ゆとりもあり、社会参加意欲も高い。他の人(孫や孫の親世代)

など)の安全のためにひと働きしてもらおう余地は十分にある。他の人のために役立つことが、自分をも安全に向けて動機づける機能をもつことに注目すべきである。

受講者の方から頂いたご意見

□考察、話が非常に面白かった。特に高齢者事故に関する話は、日頃なんとなく感じていたことを言葉にしてくれたため、整理された。

昔の子どもから学ぶ

主に子どもを対象にした交通安全教育の将来像を提示する

講師 大谷 亮
(一般財団法人 日本自動車研究所 安全研究部)

第1講座は、子どもに対するこれからの交通安全教育のあり方についての講義が行われた。



子どもは将来のドライバー候補

近年では、子どもの交通事故は減少しているものの、歩行中の事故の下げ止まりが見られる。(裏面へつづく)

そして歩行中の事故の第一当事者には子どもが多い。絶対数として子どもの交通事故が減ったからといって安心していいのだろうか？

また、子どもは将来のドライバー候補でもあるので対処療法的な対策のみではなく、将来に結びつく対策を行う必要がある。

子どもの特徴

子どもの一般的な性格傾向として、衝動的な側面をもつことが挙げられる。これは、子どもが第一当事者となる事故原因として多い、「飛び出し」を誘発するものではあるが、子どもの衝動性は、脳の発達においては正しい道程である。

求められるのは飛び出さないための子どもへの教育と、友人や教員・保護者の配慮である。

この他にも子どもには年齢・段階に応じて、知覚特性(自らの歩行速度を過大視する/横断に要する時間の判断が困難など)や道徳・慣習・法規の認知(6歳位までは法規を遵守すれば絶対的安全が確保できると認識)などの特徴がある。

子どもへの教育担当者の心構えとしては、学齢段階に応じた教え方を行うこととして、高学年には答えは一つではなく複数あることを伝えたり、あえて難しい言葉を使うことや、低学年が対象の場合は平易な言葉と具象例、重要なことは反復することなどが挙げられた。

* * *

受講者の方から頂いたご意見

□子どもの年齢特性による順を追った教育の大切さが理解

できた。地域での地道な教育が将来の安全に資するものという考え方に共感できた。

第2講座

マツダの安全への取り組み

子どもから大人まで安心できるクルマづくりへの取り組みを紹介する

講師 原田 千花子

(マツダ株式会社 商品戦略本部 技術企画部)

第2講座は、将来の安全に対するマツダの思想と取り組みについての講義が行われた。



マツダの安全思想

マツダでは、人間中心の考え方に基づいた「走る歓び」を感じるクルマづくりをしている。

これを支える重要な要素である、安全性能を高める考え方として、子どもの安全に関する取り組みを紹介する。

例えば、運転席から見たAピラーとドアミラーの間に隙間ができるよう配置することで、背の低い子どもを発見しやすくする工夫や、子どものエンジン誤始動を防ぐシステムなど、様々な工夫を行っている。その他、事故発生時の歩行

者保護対策としては、ボンネット部位に衝撃を吸収する部材を使用・バンパー部位では歩行者の足が車両の下に滑り込んでしまふことを防ぐための形状や、補強部材を使用するなどの対策を行っている。

最悪の状態には車が自動運転を

マツダの将来の考え方としては、「個人」の自由な移動による生活の充実に向けて、安全性を求める「機械中心の考え方」と人が自分の能力を使い成長を求める「ヒト中心の考え方」があると考えている。これはどちらかが正しいというものではない。

将来の技術コンセプトとしては、通常は人が運転操作を行い、もし最悪の状態になれば、人に替わり車が運転、最適な場所への移動を行い周囲を含めた安全の確保や外部への連絡を自動で行う。というものが考えられる。

受講者の方から頂いたご意見

□マツダの安全思想、取り組み、今後の展望を話を聞いていくなかで、いかにクルマがドライバーが起すミスやフォロワー、事故や危険を回避できるように創意工夫がなされているかを感じることができました。

命の尊厳と事故による損失

たった一つしかない大切な命、誕生と事故の代償について考える

第1部 〈保険業界の立場より〉

講師 金泉 浩二
(一般社団法人 日本損害保険協会 業務企画部)

第3講座第1部では、事故による損失と保険の役割について、保険業界の立場から講義をいただいた。



保険金支払いデータで見る交通事故

平成26年度の保険金支払状況を見ると、自賠責保険の支払件数は死亡3,977件、傷害115万4千597件となり、おり、このデータから推計すると100人に1人は交通事故に遭う(被害者になる)ということになる。これは人身事故のみ

のデータであるが、同年の物損事故による保険金の支払件数は238万725件となっている。このデータから、交通事故という人身事故がクローズアップされるが、物損事故を含めると数倍の事故が発生していることがわかる。

自転車事故の高額賠償事例

自転車事故による高額賠償事例は、男子小学生(11歳)が歩行中の女性(62歳)と正面衝突し、女性は頭蓋骨折等の障害を負い意識が戻らない状態となった事故で9千521万円となつた

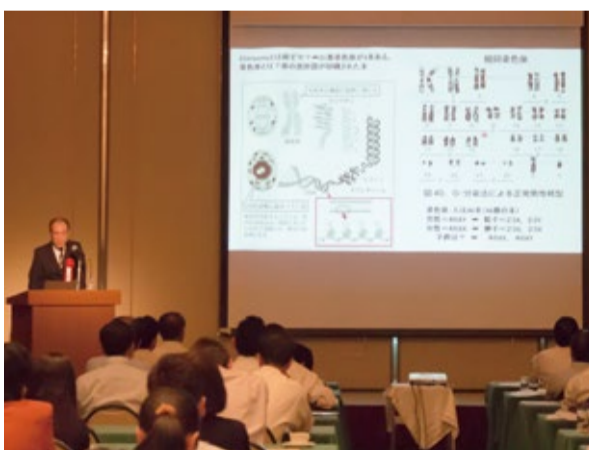
ている。

そして近年自治体によっては自転車の賠償責任保険への加入を義務付ける条例を制定する動きもあるなど、自転車事故に備える保険への加入が進んでいる。

第2部 〈医師の立場より〉

講師 小橋 勇二
(岡山市立市民病院 産婦人科 診療部長)

第3講座第2部では、命の尊厳について、医師の視点による専門的な解説を交えながらの講義が行われた。



命の誕生

元気な子が誕生するということは、妊娠の成立から出産まで、不妊や染色体異常、出産の段階まで来たとしても、早産や分娩時の胎位の異常など、数々の難関を乗り越えてくるということであり、稀有なことである。

交通事故によって命の伝承が途切れるということ

自動車・自転車等は人の命を奪う凶器となりうるものである。交通事故で死亡するということは、親から子へ子から孫へと継がれるはずの尊い命がそこ

で途切れるということである。それゆえに、乗り物を運転する本人はもちろんのこと、乗り物を作る人、道路を建設・整備する人、交通安全教育の人、交通安全文化に関わる全ての人が、今一度、命の尊さをかみしめ、今後の交通安全に向けさらに奮闘していただきたい。

* * *

受講者の方から頂いたご意見

□保険金支払データから推計した交通事故の発生状況は新鮮でわかりやすかったです。自転車事故の状況や保険についても重要であり、広く一般的に知られるべきだと感じました。(第1部)

□今まで、これほど詳しい命の誕生について聞いたことがありませんでした。改めて大変な事であることがよくわかりました。その命の大切さを交通事故でなくすということは絶対にあつてはいけません。初心運転者教育現場で活用していきたいです。(第2部)

編集後記

第20回を迎える交通大学も、多くの方にお越しいただき無事開催することができました。

また、今回は意見交換会も開催することができました。

講義を頂いた先生方、受講者の皆様、ご多忙の中本当にありがとうございました。

